

## [課題演習報告]

# 児童の学校適応感を高める異年齢集団活動の創造 —児童が自発的、自治的に企画・運営する委員会活動を通して—

田 中 裕 輝

Yuki TANAKA

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース  
学校適応支援リーダープログラム  
大川市立大川小学校

(2024 年 1 月 10 日受理)

本研究は、異年齢集団活動（児童会における委員会活動）を自発的、自治的に行うことができるようにするための仕組みづくりをすることで、児童の学校適応感を向上させることを目指した。活動の仕組みづくりは、教師と児童の2つの側面から行った。まず、教師の側面では、児童に対する教師の適切な指導と評価の在り方を明らかにした。児童の側面では、自発的、自治的な活動を促進するために、児童の発意、発想を活かした創意工夫ある活動と常時活動を充実させていく仕組みづくりを行った。これらの結果、他者との関わりを通じた活動の中で、児童がより充実感や達成感を味わうことができる様子が多く観察された。また、尺度等を用いた分析の結果、学校適応感に加え、社会性においても複数の項目で有意な高まりが認められた。

**キーワード：**学校適応感、異年齢集団活動、委員会活動、自発的、自治的な活動、自己有用感

## 1 問題と目的

### (1) 主題設定の理由

令和3年度児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果(文部科学省, 2022)では、小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は244,940人と、9年連続で増加しており、重要な教育課題といえる。筆者の在籍校がある中学校区においても、中学校進学後に不登校や不登校兆候になる生徒が多く、令和2年度は、中学校の生徒数348名中26名で約7%が不登校や不登校兆候であった。

これらの課題を解決するためには、不登校の未然予防のための魅力ある学校づくりを目指し、生徒指導の一層の充実を図っていく必要がある。生徒指導提要(改訂版)(文部科学省, 2022)において、特別活動は生徒指導の目的に直接迫る学習活動であることが述べられている。一方で、京免・川本・長谷川(2023)の調査によれば、特別活動の指導

においては、「自主性や自発性を育てる指導が不十分であり、教師の押し付けになっている」と感じている教師は60.1%となっている現状もある。実際に、本校教師に対して行った異年齢集団活動に対する意識調査を行ったところ、自発的、自治的な活動に対する教師の指導のあり方に課題があった。そこで本研究では、異年齢集団活動を充実させる仕組みづくりを行う。児童が自発的、自治的に委員会活動を企画・運営する中で、責任を持って役割を果たし、充実感や達成感、連帯感を得ることが、学校適応感を高めると考えた。

### (2) 研究主題の意味

主題について、「適応感」とは、「個人と環境との主観的な関係」(井上・栗原, 2019)のことであり、個人の適応の一指標である。「学校適応感」とは、「学校生活や学校での活動に対する満足度や帰属意識などを要因とする児童生徒の主観的な心理状態」(松山・倉智・数藤・宮崎, 1984)を意味している。「児童の学校適応感を高める異年齢集団活動の創造」とは、小学校高学年児童が企画・運営する

各種委員会活動における異年齢集団活動（以下、異年齢集団活動）において、自発的、自治的な活動が推進される仕組みづくりを行うことである。

副主題について、「自発的、自治的に企画・運営する委員会活動」とは、「自主的・実践的」であることに加え、目的をもって編成された集団において、教師の適切な指導の下、児童が自ら課題を見出し、解決方法について合意形成を図り、目標を達成していく活動である。

### (3) 研究の目的

本研究では、児童の学校適応感を高める異年齢集団活動の創造を目指し、児童が自発的、自治的に委員会活動を企画・運営できるようにするための、活動の仕組みづくりを究明する。

### (4) 研究の仮説

委員会活動を自発的、自治的な活動にするための活動の仕組みづくりを行えば、児童は活動を通して上級生としての自覚を高めながらより充実感や達成感を感じ、その結果児童の学校適応感を高めることができるだろう。

### (5) 具体的方策

活動の仕組みづくりは、教師と児童の2つの側面から行っていく。まず、教師に対しては、委員会活動に関する意識調査を行い、実態を把握する。出てきた課題をもとに、委員会活動の学習過程の各段階における教師の適切な指導と適切な評価を明らかにして全教師に示す。次に児童に対しては、自発的、自治的な活動を促進するために、児童の発意、発想を活かした創意工夫ある活動と常時活動を充実させていく。

創意工夫ある活動では、前年度踏襲型からの脱却を図るために、全教師に対して創意工夫ある活動と常時活動の違いを説明し、理解を促す。図1をもとに、児童の課題から議題を選定し、自分事と捉えさせることや役割を明確にして責任を持たせること、カレンダー等を活用して見通しを持たせること等、要点を大切にしたい指導を行ってもらう。併せて、児童の活動を褒める具体的な視点（表1）を示し、共通理解を図ることで、児童を意欲的、意欲的にほめることができるようにする。

常時活動では、児童が自分の役割に責任を持ち、自発的、自治的な活動を行うことができる仕組みづくりを行うために、委員長会議や委員会会議の開催、委員会交代や活動記録表を見直すようにする。委員長同士、委員会のメンバー同士での交流を取り入れることで、見通しをもち、不安なく活動できるようにする。また、学期のめあてに加え、週ごとに目標を立てて活動を行うことで、担当教師や他の児童に評価してもらう場を増やしていく。

## 2 研究 I

### (1) 目的

教師の適切な指導のもと行われる異年齢集団活動を通して、自発的、自治的な活動が推進されるような仕組みづくり（教師の適切な指導と評価を明らかにすることや創意工夫ある活動を充実させること）を行うことで、児童に充実感や達成感を味わわせ、学校適応感の向上を目指す。

### (2) 方法

①研究期間 20XX年4月～20XX年12月

②研究対象 第6学年児童43名

第5学年児童1名

### ③実施内容

委員会活動を中心に、担当する教師の適切な指導のもと、委員会活動を自発的、自治的に企画・運営できるようにするための仕組みづくりを行った。具体的には、常時活動だけではなく、創意工夫して行う内容を充実させていくことを共通理解することに加え、委員会活動の学習過程の各段階における教師の適切な指導と評価について明らかにして示した。このことで、自発的、自治的な活動をより促進させ、充実感や達成感をより味わうことができるようにした。

表1 児童の活動をほめる具体的な視点

1. 長所を見つけ、自信をつけることができるようにほめる
2. 言葉や態度に喜びを表して心を込めてほめる
3. 結果だけではなく、努力している姿やその過程をほめる
4. 「何をほめているのか」を明確にして、具体的にほめる
5. 子どものよい行動の表れを見逃すことなく、積極的にほめる

図1 本研究における学習過程における教師の適切な指導内容（小学校指導要領（平成29年告示）解説） 特別活動編 児童会活動の学習過程例をもとに報告者が一部改正

①問題の発見、議題などの選定 ○児童自身が課題を見つけること ・教師からの課題の提示 ・聞き取りやアンケート調査 ・議題箱の設置	②解決に向けての話し合い ○互いのよさや個性を生かせる話し合いにすること ・よさや個性を生かした役割分担 ・互いの意見や考えを尊重する	③解決方法の決定（合意形成） ○合意形成を図りながら自分の役割を明確にし、意思決定すること ・役割の明確化、具体化（役割分担表などの活用）
●次の課題解決へ ※特に実践から振り返りにおいては、児童の日常の活動に対して、褒める視点をもとに、形成的評価を行っていく。	⑤振り返り ○児童が成果を実感できる具体的な評価をすること ・褒める視点に基づく具体的な評価 ・担当教員以外からの評価（友達や学級担任からの評価）	④決めたことの実践 ○役割を果たし協力できる場づくりを行うこと ・個に応じた声掛け（状況確認） ・活動時間の設定 ・活動計画表（カレンダー等の活用）

#### ④測定内容と測定方法

##### ア 6 領域学校適応感尺度 ASSESS (以下, ASSESS)

児童の学校適応感を分析するために, ASSESS (井上・栗原, 2019) を活用する。6 月と 12 月に実施し, 6 因子の変化を比較することで, 児童の学校適応感の変容を分析する。

##### イ 児童会活動セルフチェックシート

教師の児童会に関する課題意識の把握を行うために, 学級会セルフチェックシート (野中・脇田, 2022) をもとに作成した, 児童会活動セルフチェックシートを活用する。

##### ウ かつどう社会性尺度

かつどう社会性尺度 (宮田, 2010) とは, 「自己実現」「集団貢献」「他者認知」「協調行動」の 4 領域から構成される 5 件法で答える尺度である。社会性の変容の分析に加え, 「自己実現」「集団貢献」の因子を構成している質問項目「他者に認めてもらえている」「集団に貢献することができている」から, 児童の自己有用感の変容について分析する。

##### エ 自由記述式アンケート

自由記述式アンケートは, 活動を企画・運営した児童に活動後に自分がしたことや活動を通して分かったことなどについて自由記述してもらうものであって, 記述された内容は AI テキストマイニング (株式会社 UserLocal) によって分析し, 児童の側から見た異年齢集団活動の効果を質的に検証するものである。

(※ア, ウについては統計分析ソフト HAD (Ver. 17\_204) (清水, 2016) を使用して分析を行う)

本研究では, 児童個人の情報公開は行わない。研究内容の公開に当たり, 在籍校の校長の承諾を得ている。また, 児童が行うアンケートや振り返りで, 個人名が第三者に特定されることが無いことを確認している。

#### (3) 全ての委員会を対象とした研究の実際

9 月より 6 年生児童 43 名と 5 年生児童 1 名, 委員会活動の担当教員を対象に, 以下の 2 つの内容について実践を行った。

##### ①研究の目的と学習過程における教師の適切な指導と評価についての共通理解 (教師の側面)

自発的, 自治的に活動することは, 在籍校の重点目標「自分で考え, 行動する子どもの育成」や中期目標「自分で考え, 協働して楽しい学校をつくる子どもの育成」につながることにについて共通理解を図り, 全教師で同じ目標に向かって取り組むことができるようにした。その上で, 委員会の担当教師や高学年担任に対して学習過程における教師の適切な指導と評価の在り方について図 1 と

表 1 を示し, 創意工夫ある活動を充実させ, 児童の活動を具体的にほめ, 評価できるようにした。

##### ②創意工夫して行う活動内容の充実 (児童の側面)

委員会活動については, これまでの教師の活動経験に加え, 前年度までの活動を踏襲しながら行われている実態があった。そこで, 委員会活動とは, 学校生活を維持するための当番活動としての「奉仕的内容 (常時活動)」と学校生活の向上のための「創意工夫して行っていく内容」があることを明確にし, 創意工夫を大切に活動を行っていくことができるようにした。環境委員会では, 学期初めに教師が活動内容を決めるのではなく, 教師が児童に対して, 何が課題でどのような取組をしたいか問いかけ, 児童からアイディアを引き出して活動するようにした。その後の計画段階でカレンダーに活動予定を記入することで, 児童が見通しをもって自発的に活動できるようにした。また, 健康委員会では, 新聞づくりにおいて, デザイン, 文章, 絵というように児童の得意なことに合わせて役割を明確にし, 一人一人が活躍できる場づくりを行った。特に 6 年生についてはリーダーシップを図り, 達成感や充実感を感じながら作業を進めることができるようにした。研修だよりや職員会議の場を利用して教師に説明を行うとともに, 委員会ごとに創意工夫した活動として取り組むことができる活動例を複数示し, 具体的にイメージを持つことができるようにした。

#### (4) 研究 I の結果と考察挿入

##### ①ASSESS の結果から

表 2 は 6 年生の異年齢集団活動に取り組ませる前と, 活動を行った後の ASSESS の 6 因子の学級平均の変容を示したものである。

表 2 第 6 学年の ASSESS の 6 因子の変容

因子名	M 平均		時期	
	SD	標準偏差	6月	12月
生活満足感	M		3.76	3.67
	SD		0.88	0.91
教師サポート	M		4.04	4.28 *
	SD		0.70	0.59
友人サポート	M		4.06	4.23
	SD		0.76	0.73
向社会的スキル	M		4.13	4.26 †
	SD		0.64	0.57
非侵害的関係	M		1.94	2.04
	SD		0.77	0.77
学習的適応	M		3.71	3.62
	SD		0.87	0.84

N=38 注1 Max=5, Min=1 注2 \* $p<.05$ , † $p<.10$

「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」「非侵害的関係」については、得点の増加がみられた。それぞれの結果の差異を比較するため、対応のある  $t$  検定を行ったところ、「教師サポート」に有意差がみられ、実施後の得点の方が実施前の得点より有意に高く、向社会的スキルには有意傾向がみられた。

この要因として、以下のことが考察できる。1 つ目は異年齢集団活動を通して、児童の活動に対する教師の適切な指導が行われたことから、教師サポートの得点が向上したと考えられる。教師主体ではなく児童に任せる指導により、「先生に信じてもらえている」という自信がついたことや、5 つのほめる視点をもとに具体的に評価されたことで、「先生に活動を認めてもらえている」という自信をつけたことが影響していると考えられる。実際に、委員会における教師の指導の仕方を観察していると、体育委員会を含む複数の委員会で「どのような活動をしたいですか」と、児童主体で活動するための声掛けが行われていた。

2 つ目は教師が活動の場の設定を行い、児童が互いに協力し、支え合いながら活動を進めることができるように関わっていったことである。このことが、友達とのよりよい関係を築くことにつながり、友人サポートや向社会的スキルの得点の増加につながったと考えられる。実際に教師が進行状況を確認しつつリーダーに声をかけることで、児童同士で互いに声をかけあうことができる環境をつくっていた。このことにより、互いに責任を果たしつつ協働ができ、向社会的スキルの得点の増加につながったと考えられる。

2 学期に、創意工夫を行った活動として実際に取り組まれた内容を表 3 にまとめた。

## ② かつどう社会性尺度から

表 4 は 6 学年における異年齢集団活動を行う前と、9 月から 12 月まで異年齢集団活動を行った後のかつどう社会性尺度における各アンケート項目の平均の変容を示したものである。

表 3 各委員会における創意工夫された活動

委員会名	創意工夫された活動内容
運営	・児童会スローガンの投票 ・中学校区の 4 校交流会（4 校に共通する挨拶の目標について） ・縦割り班による学級会（各グループで頑張りたい挨拶の目標について） ・運営委員会によるお知らせ掲示板の作成
放送	・先生の誕生日紹介
図書	・図書室キャラクターコンテスト
健康	・歯を大切に新聞、熱中症対策新聞
体育	・オリジナル体操づくり（動画の配信、掲示物作成） ・リレー大会 ・なかよしドッジボール大会
環境	・環境ポスターづくり（お花の豆知識、廊下の様子！危ないところ）
売店	・「売店で変えるもの金額一覧表」の配布

アンケート項目の 10 と 18 以外の項目では、得点の増加がみられた。アンケート項目の結果について、平均の差異を比較するため対応のある  $t$  検定を行ったところ、アンケート項目 1, 2, 3, 7, 8, 9, 12 に有意差がみられ、実施後の得点の方が実施前の得点より有意に高まった（表 4）。

「自己実現」の項目 1, 2, 3 の結果については、各児童の得意なことを生かして役割分担を行い、最後まで責任をもち活動することができたことに加え、委員会担当の教師や担任からほめられたことで、自己有用感が高まったことが要因であると考えられる。項目 7, 8, 9 については、他学年のために活動することを通して、集団の中における高学年としての自分の立場や役割を自覚し、何をすべきか自分で考えて行動することを通して、連帯感や責任感を養うことができたことが要因であると考えられる。また、役割を果たす中で他学年に感謝され、認められることを通して、「集団のために貢献できた」と感じ、自己有用感を高めることになったと考える。項目 12 については、委員会の活動内容について話し合い、合意形成を図りながら役割分担を行う中で、相手の気持ちをとりえることができたことが要因であると考えられる。

表 4 第 6 学年のかつどう社会性尺度の項目ごとの変容

領域名	質問項目	時期	
		6月	12月
自己実現	1 自分のよさを、かつどうに出すことができた。	3.41	3.92 *
	2 自分のかつどうやくは、ほかの人からみとめてもらえた。	3.21	3.72 *
	3 このかつどうをして、自分にじしんがついた。	3.36	3.69 *
	4 自分がやってみようとおもったことは、あきらめずにとりくめた。	3.97	4.08
	5 自分なりに、かつどうできた。	3.56	3.82
集団貢献	6 よく知らなかった人に、自分から声をかけることができた。	3.49	3.77
	7 みんながいっしょにできるように、さそったり、声をかけたりした。	3.54	3.95 *
	8 このかつどうが、うまくいくように、じゅんぴやしこをした。	3.51	3.90 *
	9 いつもめあてのことを考えながら、かつどうした。	3.18	3.72 *
	10 みんなが、かつどうできるように、はげますことができた。	4.28	3.69
他者認知	11 自分なりに、みんなのやくに立つ、行どうができた。	3.51	3.77
	12 自分のやりたいことをゆずって、協力している人がいたと、分かった。	3.95	4.46 *
	13 ういろうろなことを、ほかの人から、教えてもらえた。	3.97	4.23
	14 めあてをまもって、みんなと、かつどうすることができた。	3.97	4.18
	15 協力でできても、その人たちの考えはすべて同じではないと、分かった。	4.23	4.31
協調行動	16 みんなのよさは、一人一人ちがうと分かった。	4.59	4.72
	17 さいごまで、みんなといっしょに、かつどうできた。	4.31	4.38
	18 気のあわない人とは、いっしょに、かつどうできなかった。	2.54	2.54

N=39 注1 Max=5, Min=1 注2 \* $p<0.05$

表 5 児童 A の感想の変化（自由記述式アンケート、担当教員の様相観察から）

	7月	12月
児童 A への自由記述式アンケートと聞き取りから	・みんなと協力できた。僕の の仕事が、できたから 少し自信がついた。	・活動が楽しい。また来年 もこの委員会に入って頑張 りたい。僕はここなら頑張 れる。3 学期も頑張る。
委員会担当教員による様相観察から	・いつも楽しそうに活動し ている。任せられた仕事に 対して熱心に取り組んでお らいながら活動している。	・「6 年生では何の委員会 に入りたいでしょう。」と 笑顔で伝えにきた。また同 じ委員会に入りたいと話し ている。

### ③自由記述式アンケート結果と担当教員による様相観察の結果から

5年生の児童Aは4月当初、学級における係活動や委員会活動に対して意欲的ではない状況がみられた。しかし、異年齢集団活動を通して、与えられた役割を果たし、6年生に声をかけてもらいながら協力して活動し、その過程や成果を具体的に認められたことで、7月と12月に行った自由記述式アンケートや担当教師の様相観察の結果から、表5のような感想が見られた。

#### (5)研究Ⅰの成果と課題

研究Ⅰでは、異年齢集団活動における教師の適切な指導と評価を明らかにするとともに、異年齢集団活動の中でも、創意工夫のある活動を充実させる仕組みづくりを行うことが、高学年児童の学校適応感にどのような影響を及ぼすのか、いくつかの尺度をもとに考察した。

研究Ⅰの成果として、自発的、自治的に企画運営する委員会活動は、児童の学校適応感を高めると考える。それは、学習過程における適切な指導が明らかになることで、教師の活動内容への理解が深まり、より活動が充実するからである。それは、一人一人がリーダーとして役割や責任を果たす場を多く生み出すことになる。また、適切な評価が行われることは、異学年との関わりの中で他者の役に立つことができたと感じたり、教師や友だちから認められたと感じたりする機会となる。

このことは、「学級内では消極的な児童も異年齢集団では積極的に関わることが可能であり、高学年までに個人が経験してきたものが仲間関係を構築する際にその経験を踏まえて発揮できているのかもしれない」（八木, 2018）と述べられていることにも当てはまる。

しかし課題として、ASSESSの結果では「生活満足感」の得点の増加が見られなかったことや、かつどう社会性尺度で「他者認知」「協調行動」の2つについては、有意差が見られなかったことがあげられる。これは研究Ⅰが、児童の側面においては、創意工夫のある活動にのみ重点を置き実践を行っており、委員会のメンバーで協力して日常的に行う、学校生活に必要な常時活動を充実させるための工夫が無かったことが一つの要因であると考えられる。

研究Ⅱでは、教師の適切な指導と評価を活用した指導を継続させ、創意工夫ある活動の充実を図るとともに、常時活動も合わせて充実させることで、児童の学校適応感をさらに高める仕組みづくりを究明していく。

## 3 研究Ⅱ

### (1)目的

児童が自発的、自治的に異年齢集団活動を企画・運営できるようにするために常時活動を充実させる仕組みづくりを行う。学校生活に不応が見られる児童にとって、異年齢集団活動がさらに役割や責任感、連帯感を生み出す活動となり、このことにより対象児童の学校適応感の向上を目指した。

### (2)方法

①研究期間 20XX年6月～20XX年12月

②研究対象 第5学年児童 35名  
第6学年児童 45名

### ③実施内容

学校生活に不応のある児童も責任を持って役割を果たし、連帯感や充実感、達成感を生み出す異年齢集団活動の仕組みづくりを行う。

具体的には、委員長会議や委員会交代の仕組みを取り入れ、児童同士の情報交換の場や一人ひとりが活動を評価される場づくりを行う。このことを通して、不応のある児童の活動に対する不安を取り除くとともに、友達と協力しながら責任をもって自分の役割を果たすことができるようにする。また、低・中学年が高学年の常時活動へ感謝の気持ちを伝える場づくりを行い、異年齢との関わりの中でさらなる充実感や達成感を味わうことができるようにする。

### ④測定内容と測定方法

児童の学校適応感の変容を分析するために、ASSESSを実施する。また、児童の社会性や自己有用感の変容を分析するために、かつどう社会性尺度を実施し、対応のあるt検定を行い、分析を試みる。さらに、学校に不応のある対象児童に対してインタビューや自由記述式アンケートを実施し、児童の変容の分析を試みる。

### (3)研究の実際

#### ①常時活動についての共通理解

常時活動の充実に向けた本年度の研究の方向性について職員会議で共通理解を図った。特に、現状では行われていない常時活動へ対する教師の日常的な評価や、児童相互による評価が大切であることを伝えた。また、常時活動を自発的、自治的な活動とするための仕組みづくりについて、日々の活動にやりがいを感じ、責任をもち、自らの役割を果たせる工夫、友達と協力できる工夫、活動への不安を取り除き見通しをもち活動できるようにする工夫が必要であるという説明を行った。

## ②委員長会議と委員会会議

委員長会議とは、各委員会の委員長で構成され、委員会活動日の2週間前に実施する会議である。この会議を設定することを通して委員会同士の情報共有の場ができ、活動に対して不安を感じている委員長も、他の委員会の活動内容を参考にすることが可能になる。また、2週間後の委員会活動を教師主導ではなく、委員長を中心に児童が主体となり進めることができる。

委員会会議とは、委員会活動の日に常時活動を行うだけではなく、活動内容をよりよくするために日頃の活動をふり返り、課題や改善案を出し合う会議である。常時活動に対して振り返り、活動内容について委員会のメンバー全員で話し合い、よりよい活動へと改善していくことを目指すことで、自発的、自治的に企画・運営する力が向上すると考える。

## ③委員会交代と活動記録カードの工夫

委員会交代とは、各種委員会のメンバーを2グループに分け、それぞれのグループが一週間交代で活動を行い、毎週金曜日の朝の活動の時間に、一週間の成果と課題、仕事で引継ぐ内容を互いに伝え合い、相互評価を行う場のことである。

活動記録カードの工夫とは、これまで学期初めと学期末にしか活用されてなかった委員会のめあてと評価の記録カードを、児童が日常的に自己評価できるようにし、さらにそこに教師からの評価が毎週行われるように工夫したものである。

この工夫を取り入れることで、児童が活動に対する自分のめあてを立て、自身の活動をふり返り、自己評価を行うだけではなく、教師からと児童相互による評価が加わることで、より責任感、充実感や達成感を味わいつつ活動することが可能になると考える。

## ④掲示板の工夫

③で述べた常時活動の工夫により、活動内容を教師と高学年の児童間で評価し合う場を生み出すことはできる。しかし、その他の学年（低学年や中学年）が、高学年児童の活動を評価するような場は存在しない。そこで掲示板を利用し、各種委員会からの連絡事項を書いたり、委員会の活動に対して1年生から4年生が感謝の気持ちや願いを書いたりすることを目的とした、児童が異年齢同士相互に関わり合うコーナーづくりを行った。この取組は、委員会担当教師を通して、掲示板の活用方法について全教師へ説明を行い、9月より行った。特に掲示板に書き込む内容については、委員会からのお願いに関しては、「給食を取りに来

るときは必ずあいさつをしてください」といった否定的、強制的な書き方ではなく、「もっとあいさつが増えると嬉しいです」のように、肯定的な書き方の指導を行うことを大切にしたい。

この取組を通して、高学年児童が行っている常時活動を他学年から評価されることで、上級生としての自覚を高め、活動の中で充実感や達成感を味わうことをめざした。

## (4)研究Ⅱの結果と考察

### ①ASSESSの結果から

表6は5年生と6年生の異年齢集団活動に取り組ませる前と、活動を行った後ASSESSの6因子の学級平均の変容を示したものである。

それぞれの結果の差異を比較するため、対応のあるt検定を行ったところ、「向社会的スキル」に有意傾向がみられ、実施後の得点の方が実施前の得点より高かった。また、6年生については、「友人サポート」に有意差がみられ、実施後の得点の方が実施前の得点より有意に高かった(表6)。

全体的な結果として有意差が多く見られなかったことの要因として、以下のことが考察できる。

ASSESSは、委員会活動を対象とした尺度ではなく、主に学級内における学校適応感を把握することを目的としている。つまり、学級内における児童の関係や児童と教師の関係といった、委員会活動以外の要素が多く関係している。それを踏まえ、今回ASSESSを実施する際に、児童に対して委員会活動内容を意識して回答させるための声掛けが無かったため、アンケート結果には委員会活動に対する意識が反映されていないと考えられる。しかし、後述の「③インタビューや自由記述式アンケートの活動結果」で示している表8の結果では、委員会活動内容について書くように意識させたこともあり、向社会的スキルや友人サポートの変容に関する記述が見られた。アンケート実施方法の工夫を行えば、さらに効果が表れたのではないかと考える。

表6 第5学年と6学年のASSESSの6因子の変容

因子名	M SD	平均 標準偏差	5年(N=31)		6年(N=43)	
			時期		時期	
			6月	12月	6月	12月
生活満足感	M		4.14	4.14	3.22	3.00
	SD		0.89	0.94	1.02	1.09
教師サポート	M		4.45	4.47	3.56	3.38
	SD		0.58	0.63	0.90	0.95
友人サポート	M		4.40	4.35	3.57	3.81 *
	SD		0.79	0.91	0.99	0.86
向社会的スキル	M		4.49	4.62 †	3.83	3.86
	SD		0.59	0.48	0.76	0.78
非侵害の関係	M		2.47	2.65	2.79	2.65
	SD		1.21	1.28	1.17	0.92
学習的適応	M		3.32	3.20	2.96	2.79
	SD		0.81	1.08	0.95	1.15

注1 Max=5, Min=1 注2 \* $p<.05$ , † $p<.10$

## ②かつどう社会性尺度の結果から

表7は5学年と6学年における異年齢集団活動に取り組ませる前と、取組後のかつどう社会性尺度における4領域の質問項目ごとに平均の変容を示したものである。

アンケート項目の結果について、平均の差異を比較するため対応のある  $t$  検定を行ったところ、多くのアンケート項目で有意差がみられ、実施後の得点が実施前の得点より有意に高まった。また、項目17については有意傾向がみられた(表7)。

「自己実現」領域の項目1, 3, 4, 5の結果については、委員会交代の仕組みづくりを行ったにより、児童の活動回数が大きく増加したことや、活動記録カードの工夫により、これまで学期末にしか評価していなかった自分の活動を毎日自己評価し、教師にも週に1度評価される機会ができたことが影響していると考えられる。自分のよさを発揮し活動できる機会が増えたこと、その活動について自己評価するだけではなく、教師や友達からのプラスの評価を受けることが、充実感や達成感を得ることにつながり、「自分のよさを活動に出せた」「自信がついた」「認めてもらえた」「活躍できた」と感じる機会になったと考える。

「集団貢献」領域の項目6, 7, 8, 9, 11については、二つのことが影響を与えたと考えられる。一つ目はこれまで曜日ごとに担当者を決め、一人もしくは二人で活動していたが、委員会交代の仕組みづくりにより、四人から五人のグループで協力して一週間活動する環境ができた。活動の中で、相手のことを考え活動が苦手な友達へ声掛けをし、自分の役割に責任をもち果たす機会が多くできた。このことを通して、集団貢献の意識が高まったと考えられる。

二つ目は委員長会議の導入により、委員長同士が相互に助け合える体制ができたことである。

表7 第5, 第6学年のかつどう社会性尺度の項目ごとの変容

領域名	質問項目	時期	
		6月	12月
自己実現	1. 自分のよさを、かつどうに出すことができた。	3.63	3.97 *
	2. 自分のかつやくは、ほかの人からみとめてもらえた。	3.61	3.83
	3. このかつどうをして、自分にしんががついた。	3.50	3.88 *
	4. 自分がやってみようとおもったことは、あきらめずにとりくめた。	3.81	4.17 *
	5. 自分なりに、かつやくできた。	3.88	4.28 *
集団貢献	6. よく知らなかった人に、自分から声をかけることができた。	3.67	4.13 *
	7. みんながいっしょにできるように、さそったり、声をかけたりした。	3.76	4.06 *
	8. このかつどうが、うまくいくように、じゅんびやしごとをした。	3.89	4.25 *
	9. いつめあてのことを考えながら、かつどうした。	3.44	4.08 *
	10. みんなが、かつやくできるように、はげますことができた。	3.72	3.86
	11. 自分なりに、みんなのやくに立つ、行どうができた。	3.69	4.11 *
他者認知	12. 自分のやりたいことをゆずって、協力している人がいたと、分かった。	3.97	4.01
	13. いろいろなことを、ほかの人から、教えてもらえた。	4.07	4.14
	14. めあてをまもって、みんなと、かつどうすることができた。	3.82	4.29 *
	15. 協力でなくても、その人たちの考えはすべて同じではないと、分かった。	4.15	4.19
協調行動	16. みんなのよさは、一人一人ちがうと分かった。	4.44	4.44
	17. さいごまで、みんなといっしょに、かつどうできた。	4.25	4.47 $\uparrow$
	18. 気のあわない人とは、いっしょに、かつどうできなかった。	3.03	3.15

N=72 注1 Max=5, Min=1 注2 \* $p<.05$   $\uparrow$ ,  $p<.10$

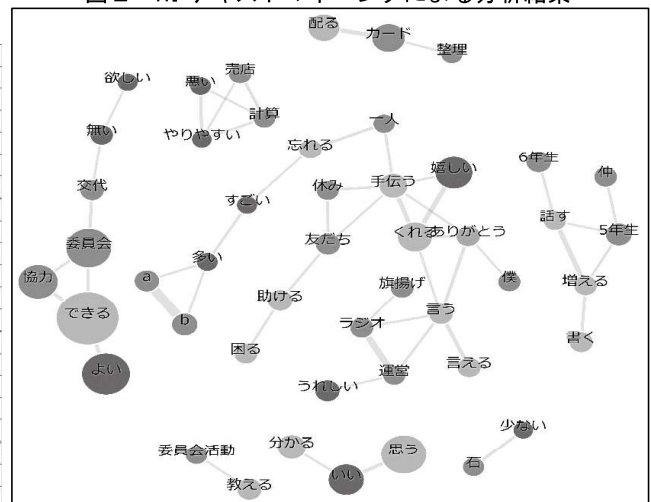
委員長の仕事に不安を感じていた児童が、活動に安心感を持ち、より積極的に活動できるようになったことに加え、委員長同士で関わることを通して委員長としての意識が高まったと考えられる。

「他者認知」領域の項目14については、活動カードにめあてを書き込む工夫と友だちとめあてを相互に伝え合う場が影響したと考えられる。一年間の活動のめあてと、学期のめあてを毎回活動時にカードで確認できたことで、常に自分のめあてを意識できるようになった。

## ③インタビューや自由記述式アンケートの活動結果から

図2は、インタビューや自由記述式アンケート結果を、AI テキストマイニング(株式会社 UserLocal)による分析を行った共起ネットワークの結果である。左に表れている「交代、委員会、協力、できる、よい」の関係は、委員会交代においてグループで一緒に活動することが、協力できるよい環境であると感じていることが分かる。実際に「協力して活動ができ仲が深まった」「委員会交代の仕組みができてから協力できるいい関係がつくれてよかった」といった内容の記述が見られた。また、下の方に表れている「分かる、いい、思う」の関係は、めあてと反省を述べ合う時間ができたことで、互いに活動を振り返り評価できる時間ができ、そこに価値を感じていると考えられる。実際に「委員会交代を通して頑張っている人がいると分かった」「自分が取り組んだことが一目でわかるのがいい、できなかったことは改善できる」といった記述が見られた。右側に表れている「6年生、話す、5年生、増える、書く」の関係は、委員会会議や委員会交代の仕組みづくりを通して、5・6年生同士で話合う機会が増え、仲が深まったと感じていることを表していると考えられる。

図2 AI テキストマイニングによる分析結果



実際に「委員会で話すことが増えたから、6年とも仲良くなったし、よく話しながら活動ができた」「委員会交代の仕組みを取り入れてから、5年生と話す機会が増えいい関係がくれたのでよかった」といった記述が見られた。中心に表れている「手伝う、うれしい、くれる、ありがとう、言う、言える」の関係は、互いに支え合いながら協力して活動する中で、友達に支えてもらっているというを感じ、友達と関わる中で自分の意見をはっきりと言えるよい関係ができたことを表していると考えられる。実際に「友だちが休んでいた時に声を掛け合って仕事ができた」「自分の意見を話し合いで言えるようになった」といった記述が見られた。

#### (5) 研究Ⅱの成果と課題

研究Ⅱでは、異年齢集団活動の中でも、常時活動を充実させる仕組みづくりを行うことが、高学年児童の学校適応感にどのような影響を及ぼすのか、いくつかの尺度をもとに考察した。

研究Ⅱの成果として、常時活動の充実、児童の学校適応感をさらに高めると考える。それは、日々児童が行う常時活動が、児童にとって仲間と楽しく安心して活動できる場となることだけではなく、少人数の仲間で、互いの目標を共有し、互いに支え合い、協力し合い、そして認め合いながら常時活動を行っていくことで、より自発的、自治的な活動となることができるからである。その中で、自己の役割を果たすことによる責任感や、友達に支えられながら協力して活動することによる連帯感をより感じる機会になっていると考えられる。また、常時活動に対して、自己評価を行い改善していくこと、その活動を担当教師より評価されることは、より充実感や達成感を感じる機会になると考えられる。

しかし課題として、委員会を構成する児童がもつ、委員会を企画・運営する力の差が、委員会活動内容の充実に影響を与えていると考えられる。実際に、委員長会議でリーダーシップを発揮する等、積極的に活動できるリーダーがいる委員会では、多くの活動場面で活動内容が充実しており、有意差が多く現れた。この結果を踏まえ、これまでの委員会活動は委員長のリーダーシップをもとに組織・運営されてきたが、役割に応じてリーダー性を発揮する「シェアード・リーダーシップ」の導入を検討したい。

## 4 総合考察

本研究では、児童の学校適応感を高める異年齢集団活動の創造を目指し、自発的、自治的に企画運営する委員会活動として、創意工夫ある活動と常時活動を充実させる仕組みづくりを行った。その結果、尺度の分析結果において多くの有意差が現れた。実際に、6年生がリーダーシップを発揮しながら5年生と関わる姿、自信をもって役割を果たし互いに協力する姿、よりよい学校生活について自治的に話し合い活動する姿等、責任感や連帯感、充実感や達成感を得ながら活動する姿を多く見ることができた。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編には、児童会活動を通して育成を目指す資質・能力として「自治的な集団活動を通して身に付けたことを活かして、多様な他者との互いのよさを活かして協働し、よりよい学校生活をつくろうとする態度を養うこと」が示された。本研究を通して見ることができたこれらの児童の姿は、自発的、自治的に企画・運営する委員会活動を目指していくことが、この資質・能力を育成する上で価値があるだけではなく、児童の学校適応感にもよりよい影響を与えるということを示している。そして、今後も児童が活動体験を積み上げ、学校の文化として根付いていくことが、さらに学校適応感の向上につながると考える。これからも継続して研究を行い、その効果を検証していきたい。

## 主な引用・参考文献

- 京免徹雄・川本和孝・長谷川祐介(2023). 特別活動がつくる学校の未来—開かれた研究と実践に向けて—, 日本特別活動学会.
- 国立施策研究所(2011)「子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」—活動実施の考え方から教師用活動案まで—」.
- 宮田延実(2010). 特別活動を通して育成する社会性についての検討「小学生の「社会的な資質」を育成するモデル化の試み」, 日本特別活動学会紀要第 18 号. 72-80.
- 文部科学省(2022). 生徒指導提要(改訂版).
- 八木利津子(2018)「小学校における異年齢集団活動がリスクマネジメントに及ぼす効果に関する研究—養護教諭がコーディネーターする教育実践に着目して—」, 日本幼少児健康教育学会誌, Jpn J Health Educ Child3, 71-82.

## 謝辞

本研究に際し、長期派遣研修の機会を提供してくださった福岡県教育委員会及び大川市教育委員会、また、在籍校の校長先生をはじめ、ご協力していただいた全ての先生方と実践をした子どもたちに、心より感謝申し上げます。